

青年期の発達課題と大学における 学生支援

なぜ今、ピア・サポート活動なのか

春日井 敏之 (立命館大学)

1. 新型コロナウイルス感染拡大に伴う休校措置と学校の役割

2020年は、新型コロナウイルス感染が世界中に拡大するなかで、その幕を開けました。日本国内では、首相によって3月2日から春休みまで全国の小学校、中学校、高等学校、特別支援学校などへの休校要請が出され、その影響は大学にまで及びました。卒業式、入学式などもとりやめ、あるいは縮小となり、休校措置は4月7日に出された緊急事態宣言とその延長によって、5月末まで、3か月間引き続く事態となっていました。

長期の休校になって、さまざまな学校生活のプレッシャーから解放されたように感じた子どももいることでしょう。家族でこんなに長く一緒に過ごす時間はこれまでになかったという声もありました。しかし逆に、ゲームやテレビ浸けの生活、昼夜逆転の生活、運動不足やストレスの蓄積、勉強の遅れと保護者の休業などによる経済格差の拡大、虐待などのリスク、一人での留守番生活、友達と会えない生活、学校生活への思い残し、長い休校から再登校への不安、感染拡大への不安などに直面しながら生活をしている子どもたちも多く生まれました。

この間、学校現場では、ICTの活用によるオンライン授業の工夫や家庭訪問等がなされていきました。しかし、学校や家庭におけるオンライン環境の有無や整備状況の差が、新たな地域、学校、家庭などにおける格差問題として浮上してきました。教育の機会均等という憲法の定めからも、教育行政の果たす役割と責任が大きく問われることとなりました。

同時に、普段当たり前のこととしてとらえられていた「学校に通うこと」の意味について、児童生徒、学生、保護者、教職員、教育行政など、教育にかかわるそれぞれの立場から、とらえ直す重要な機会となっていたのではないのでしょうか。例えば、ICTの環境が整ってオンライン授業が効率よくできるのであれば、学校に通う必要がなくなるという意見も出てくるかもしれ

ません。しかし逆に、長い休校措置によって、学校の持つ機能、すなわち学校は協同の学習の場に加えて、協同の生活の場、出会いと交流の場、家族の仕事や生活を支える場、セーフティーネットの場、ケアの場などとして重要な役割を担っていることが、明らかになってきたのではないのでしょうか。それは、大人と子どもの関係だけではなく、「友達に会いたい」という子ども同士の関係のなかで、学校は機能をより発揮していくこともはっきりしてきました。

ここに、大学も含めて、学校現場において子ども同士、学生同士がかかわり、双方向の関係を深めていくピア・サポート活動を展開していく現代的意味があると考えています。

2. 青年期の発達課題と学生支援

(1) 青年期の発達課題と葛藤、失敗体験の意味

思春期・青年期は、受け身で誕生したいのちが、もう一人の内なる自分と出会い、人生の主人公として主体的に社会とつながって生きようとするからこそ、「第二の誕生」と呼ばれます。学生たちは、これまでの家族、学校、地域などにおける他者とのかかわりを通して、多かれ少なかれ「お世話になってきた」という気持ちを持っています。その気持ちは、だからこそ「誰かを助けたい」「誰かのために役に立ちたい」といった気持ちにつながっていきます。それが人としての生き方やあり方につながり、具体的には、働くこと（職業選択）、愛すること（性と生）、社会参加すること（仕事以外等）を通して自己実現に向けた模索が行われていくのです。

自分の人生の主人公になるということは、それまでに、家族や周囲の人々が、よかれと思って敷いてくれたレールをいったん相対化し、隣人、社会、世界へと視野を広げながら、自分のペースでしたいことにこだわって、自分と誰かのために生きていくことでもあります。これまでの自分も対象化し、「自分は何者なのか。どんな人間になりたいのか。何のために生きているのか。何を一番大切にしたいのか。そのために何をするのか」などと問い直していきます。時には、道草や寄り道や遠回りなどもあるでしょう。これまで大きな挫折をしてこなかったような学生に対しては、自己責任論で孤立へと追いやるのではなく、むしろこうした自己決定を尊重し、葛藤や失敗体験を大切にしながら、継続的に応援していくようなキャリア教育、進路選択が大切になっているのではないのでしょうか。

実際、内閣府（2010）によるひきこもり当事者への実態調査によれば、複数選択ですが、「ひきこもりになったきっかけ」についての質問に対して、

高校・大学卒業までは大きな挫折もなくしのいできたと思われる若者たちが、「職場になじめなかった」(23.7%)、「就職活動がうまくいかなかった」(20.3%)のためにひきこもりとなってしまったケースが計44.0%と、非常に高い割合を示しています。逆に、小・中学校、高等学校の不登校の延長としてのひきこもりは11.9%にとどまっているのです。これは何を意味しているのでしょうか。小・中学校、高等学校在籍中に不登校となり、SOS(援助希求)が発信できたことの意味は大きいのではないのでしょうか。つまり、排除されない環境のもとで、学校にいる間に失敗付きの練習ができたということです。そのときに教師、スクールカウンセラー、相談員や「親の会」等、子どもや保護者にとって援助者とのいい出会いがあったことが、卒業して社会に着地した後もSOSが上手に発信できたり、逆に他者を援助する仕事や生き方の選択につながっているようなケースは、私がかかわってきた若者のなかにも多く見られます。

(2) 学生に伝えていること

2019年の文部科学省「学校基本調査」によれば、2018年の高等学校卒業生約105万人に対して、大学・短期大学への進学率は前年と同率の54.8%、専門学校進学率は16.3%、就職率は17.6%と報告されています。少子化によって、大学には入りやすくなっていると言われながらも、大学・短期大学への進学率は、近年の変化を見るとほとんど横ばい状況にあります。そこからは、経済的事情などといった社会的格差の問題や職業意識を明確に持っている学生の専門学校進学といった傾向も見えてきます。

私は、毎年文学部で新生を迎えたときに、次のことを強調して伝えてきました。「みなさんは比較的恵まれた環境と自身の努力によって大学に入学し、こうして出会うことができました。しかし、大学に進学できているのは、同じ世代の約50%余りです。だからこそ、みなさんには、大学での学びを自分自身のためと同時に、大学に進学しないで働いて社会を支えている同世代の仲間や自分につながる社会、世界の人々のために活かして行ってほしいと期待しています。自分が努力して学び得たものを自分のためだけに使うのは、もったいないじゃないですか。学ぶことによって、人間や社会をより深くとらえ、そこに潜むさまざまな課題を見つけ、その課題に取り組んでいてください。それを形にして、本当に伝えたい人に伝えていくことが、卒業論文や卒業研究になっていくのです。そして、卒業するときには、この大学が第一希望になることを願っています。そのために一緒にやっていきましょう」と。

大学には、第1には、研究・教育・実践を通して学生を育てながら、社会

的課題の探究と解決に向けて、その役割を果たしていく責務があります。そのためにも、第2には、学生にとっても協同の研究・教育・実践の場であることに加えて、協同の生活の場、出会いと交流の場、セーフティーネットの場、ケアの場などとして、その機能を果たしていくことが求められています。その際に重要なことは、こうした取組は、大学の教員、職員対学生の間で行われるだけでなく、失敗付きの練習も含めて、学生同士の関係のなかで行われることで、より効果を発揮してきているということです。まさに、学生による学生のためのピア・サポート活動が求められているわけです。

3. 大学におけるピア・サポート活動の可能性

(1) 多様な学生実態を踏まえた支援と学生の参画

大学における学生の多様化について、どのようにとらえていったらよいのでしょうか。当然のことですが、学生実態を踏まえる必要があります。

1つには、学修に関する課題（初年時教育、アカデミックリテラシーなど）です。基礎的な学力が乏しくて苦戦している学生、初年時の小集団授業のグループワーク等にうまく入れない学生、学力はあるが問題意識が乏しくて卒論のテーマが決まらずなかなか書けない学生、アルバイトで自活し学費や生活費を稼ぐために授業に来にくくなっている学生などが気になります。

2つには、人間関係に関する課題（社会性・協働性）です。友達が欲しいけれども、気遣いしてしまいコミュニケーションが苦手な学生、異なる文化、習慣、人間関係になじみにくい留学生、周囲からの評価を気にして自分を語れない学生、今まで一人で頑張ってきたために上手にSOSが出せない学生などが気になります。

3つには、自己意識に関する課題（自己理解、自立性）です。客観的には力量があっても強い自己否定感を抱えている学生、親から自立して生きたいのにその呪縛に囚われ葛藤している学生、発達特性などがあり周囲との違和感を抱えてなじめないでいる学生、ストレスマネジメントがうまくできずに身体化、行動化してしまう学生などが気になります。

これらの状況がいくつか重なった場合には、留年や中途退学といった事態に至る学生も少なくありません。しかし、これらの状況は、必ずしもマイナスにだけ働いているのではなく、異なる状況・環境にあり、多様な価値観を持つ学生同士が、お互いの違いを認め合いながら交流し、補い合い、学び合う場が生まれ、そのなかで学生が成長していくというプラスの側面も生んでいます。これは、仲間同士が支え合い、支援を受ける側も支援をする側も互いに成長していく、しかも支援する側、される側の関係は固定的ではない

というピア・サポートの理念の具現化でもあります。

こうした実態を踏まえて、学部での初年時教育の工夫、ICT環境の整備、奨学金制度の拡充、および学生サポートルーム、障害学生支援室、キャリアセンター、国際教育センター等における取組が行われています。その際に、多くの大学では、それぞれの分野における学生支援の取組が、教員・職員対学生という固定的な構図にとどまるのではなく、先輩として理論知、経験知、スキル等で強みを持つ学生の参加・参画を求めながら、有効な支援が探求されてきました。こうして、日本の大学におけるピア・サポート活動の土台がつくられていきました。大学による予算措置に加えて、教育行政機関等による補助金が付けられるといった条件のなかでの広がりも見られました。

(2) 学生への多様な支援、ピア・サポート活動の展開と課題

その分野は、立命館大学では次の5分野に広がっています(春日井, 2011)。

- ① 1回生の小集団教育にかかわり、「学習、学生生活、自治」の視点から多岐にわたり新生支援を行う学生スタッフ。学生部が支援。オリター、またはエンターと呼ばれている。
- ② さまざまな学生支援組織の募集に応じて必要な研修を受け、各分野で学生支援にかかわる学生スタッフ。レインボースタッフ(情報サポート)、ライブラリストッフ(図書館利用サポート)、学生広報スタッフ(オープンキャンパス、高校生へのキャンパス案内)、障害学生支援スタッフ。
- ③ 留学を希望する学生や留学生への支援を行う学生スタッフ。国際部が支援。留学アドバイザー、留学生支援スタッフ、バディ。
- ④ 授業支援を行う学生スタッフ。教学部が支援。前年度の受講生のなかから募集し、グループワークの進行補助、コミュニケーションペーパーの回収・整理などを行うエデュケーションナル・サポーター(ES)、院生から募集し、実験・実習などにおける授業補助、課題レポートの添削などを行うティーチング・アシスタント(TA)。
- ⑤ 進路、就職の相談や3回生演習(ゼミ)におけるキャリア支援を行う学生スタッフ。キャリアセンターが支援。3回生ゼミから選出されて進路、就職情報の共有とキャリアセンターと連携した支援を行うプレスメント・リーダー(PL)、進路、就職活動を終えた4回生が、1、2回生のキャリア形成を支援するジュニア・アドバイザー(JA)。

全国の大学でも、無償・有償も含めて、このような取組が行われています。しかし、ピア・サポート活動とボランティア活動とは、どこが違うのでしょうか。支援体制は確実に整いつつありますが、学生支援に必要なスキル獲得のための研修等は、どこまでできているのでしょうか。教育行政機関等によ

る補助金が打ち切られた後の大学の支援体制は、継続されているのでしょうか。ピア・サポート活動として重視している支援を行う学生への支援体制と、成長を実感しあうようなリフレクション（振り返り）の場は持たれているのでしょうか。特に、すべてのピア・サポート活動の共通基盤である傾聴を軸としたコミュニケーションスキル、自己理解・他者理解に関する研修は、どのように行われているのでしょうか。

これらの視点は、これから取組を始めようとしている大学だけでなく、これまでにピア・サポート活動の取組を進めてきた大学にとって、その内実化を図っていくうえで重要であると考えています。

（3）学生の普遍的な願いと強みを活かす

一方、立命館大学の学友会（自治会）が行った新入生対象のアンケート結果（立命館大学教学部、2009）を見ると、「大学でやりたいこと、望むことは何ですか」という問いに対して、「高度な専門の学び」29%、「幅広い教養の学び」17%、「他の学生との学び合い」16%、「自身の生き方、キャリア形成」13%といった結果が出ています。このような学生の普遍的な願いを踏まえながら、大学における学びの展開を検討する際に、本学の学生の強みとして、次の3点をあげることができます（春日井、2020）。

- ① 4年間を通した小集団教育（基礎演習、実習・講読、演習など）において獲得する集団としての教育力と個の成長
- ② オリター、エンターと呼ばれる学生スタッフなど、さまざまな学生のピア・サポート活動を通した相互の成長
- ③ 学生の課外活動への参加率の高さと、正課と課外の枠を超えて社会とつながるアクティブな学びによる実践力の獲得

本学学生部調査によれば、2018年度の学内のサークルなどに所属する課外活動への参加率は61.4%と高い水準を維持しています。全国の大学が多様な学生を受け入れているなかで、学生の強みと課題を踏まえ、入学後の伸びしろが大きい学生をどう育てていくかが、大学の社会的責任となっているのではないのでしょうか。

〈参考文献〉

- 春日井敏之（2011）「学びのコミュニティとピア・サポート活動—新入生支援、障害学生支援」
春日井敏之・西山久子・森川澄男・栗原慎二・高野利雄編著『やってみよう！ ピア・サポート—ひと目でポイントがわかるピア・サポート実践集』ほんの森出版
- 春日井敏之（2020）「立命館大学の学びの仕組みとピア・サポート」立命館大学『未来を拓く—ようこそ立命館へ—』
- 内閣府（2010）「若者の意識に関する調査（ひきこもりに関する実態調査）」
- 立命館大学教学部（2009）「立命館大学学友会新入生アンケート2006～2008」